

公立大学法人 神奈川県立保健福祉大学

大学院保健福祉学研究科

KANAGAWA UNIVERSITY OF HUMAN SERVICES

GRADUATE SCHOOL OF HEALTH
AND SOCIAL SERVICES

GUIDEBOOK 2027



お問い合わせ・アクセスマップ

公立大学法人

神奈川県立保健福祉大学

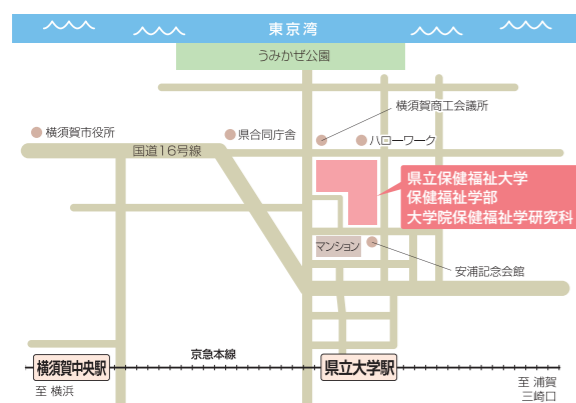
KANAGAWA UNIVERSITY OF HUMAN SERVICES

〒238-8522 神奈川県横須賀市平成町1-10-1

<https://www.kuhs.ac.jp/>

代表電話・総務課	046-828-2500
財務課(授業料)	046-828-2513
教務学生課(教務・学生生活)	046-828-2525
企画・地域貢献課(入試)	046-828-2530

県立保健福祉大学保健福祉学部・大学院保健福祉学研究科





県立保健福祉大学の校章

大学のミッションである
ヒューマンサービスの実現と、
未来に伸びてゆく学生の若さ、
活力を表現しています。

ごあいさつ



理事長
大谷 泰夫

急速に進む少子高齢化に伴う社会の変化は、新たな問題や課題を生み出しています。本学では、こうした変化や新しい課題に対して積極的に対応していくことが大学としての使命であると認識しています。

保健福祉学研究科では新たな問題への対応力を備え、保健・医療・福祉分野のリーダーとして地域社会を牽引する人材を育成します。

本学では個々の専門性を高めるとともに、保健・医療・福祉に関わる広い理解をもって、他領域とも連携・協働できる力を身につけることができるよう、異なる領域の専門職同士が共に学ぶことを通じて「ヒューマンサービス」という本学のミッションを深く理解するとともに、イノベーションへの関心と意欲を持って保健・医療・福祉サービスを提供できる高度専門職を輩出したいと考えています。

現場での実践と研究の循環の中で生み出された成果を社会に還元していく、その志を持った将来性豊かなみなさんの入学を心からお待ちしています。



学長
村上 明美

急速に進む我が国の少子高齢化、終わらない国際紛争の危機、地球温暖化による自然災害の激甚化など、私たちは今、予測不能な不確実な時代を生きています。それでも、保健・医療・福祉にかかわる専門職には、いのちの誕生から終焉に至るまで「ひと」の健康や生活を支え、人々の安寧を守る活躍が期待されています。

本学は「ヒューマンサービス」をミッションに掲げ、教育を展開しています。保健福祉学研究科博士前期課程は、保健・医療・福祉の現場で得た知識・経験の学問的検証とともに、理論化し、社会に発信していく力を身につけ、現場のリーダーや管理者として活躍できる人材の育成を目指します。保健福祉学研究科博士後期課程は、保健・医療・福祉分野における新たなサービスやケアの開発、保健福祉人材の育成や政策提言、健康寿命の延伸など、専門分野の学問の発展に寄与し、現場に変革をもたらす研究成果の産出を目指します。

不確実な時代だからこそ、大学院での学びが本学のミッション「ヒューマンサービス」の実現にどのように結びつくのかを常に意識し、主体的・創造的な探究活動に取り組んでください。充実した大学院生活を送られることを期待しています。



保健福祉学研究科長
鈴木 志保子

保健福祉学研究科は、2007年に博士前期課程を、2017年に博士後期課程を開設しました。本研究科では、本学のミッションであるヒューマンサービスを使命とする高度専門職業人の育成を目標に掲げ、これまでに数多くの修了生を社会へ送り出してきました。修了生は現在、保健・医療・福祉分野において、次世代を担う高度実践者、教育者、研究者として、第一線で活躍しています。

博士前期課程では、看護学、栄養学、社会福祉学、リハビリテーション学といった各専門領域における研究の基礎を体系的に修得するとともに、専門的知識を一層深化させ、自ら課題を見出し主体的に探究する力の養成に重点を置いています。

博士後期課程では、各専門領域における高度な研究を基盤として、保健福祉学の発展に寄与する先端的かつ独創性に富んだ研究成果を創出できる研究者の育成を行っています。あわせて、領域横断的な視点から保健福祉学の研究領域を再構築し、保健・医療・福祉分野における基礎研究、応用研究、開発研究の成果を国内外へ広く発信できる人材の育成を目指しています。

本研究科では、保健・医療・福祉の現場が抱える多様な課題に対し、学術的視点から課題解決に取り組むことのできる高度専門職業人、ならびに実践と研究を継続的に推進できる人材を求めています。とりわけ、保健福祉学のさらなる発展に情熱をもって挑戦する、意欲ある方々の参画を期待しています。

大学院の特色

「ヒューマンサービス」に基づく領域を超えた学び



本学では、「ヒューマンサービス」をミッションに掲げ、各専門領域にとどまらない総合的で幅広い知識と技術を修得し、質の高い保健・医療・福祉サービスを提供できる人材の育成に努めています。その一環として、領域を超えて学び合う機会を積極的に提供しています。例えば、博士前期課程の必修科目である「ヒューマンサービス特論・演習」では、ひとつの事例を題材に、看護学、栄養学、社会福祉学、リハビリテーション学の各領域に所属する学生が、それぞれの専門的立場から検討を行い、活発に意見交換を行います。

専門分野の異なる学生との対話を通じて、一つの課題に対する多様な視点やアプローチを学ぶことができ、領域横断的な理解を深めるとともに、実践に即した総合的な課題解決力を養うことができます。

働きながら学ぶ学生を支援

長期履修学生制度（博士前期課程のみ）

職業などの事情により、標準修業年限（2年間）での修了が難しい方を対象に、最長4年間まで修業年限を延長し、計画的に履修できる制度です。設定した履修期間に関わらず、授業料は原則2年分です。博士前期課程の学生の約半数※がこの制度を活用して学んでいます。

<授業料納付額例>

	1年目	2年目	3年目	4年目	修了までの納付額合計
通常の履修	535,800円	535,800円	—	—	1,071,600円
3年間の長期履修	357,200円	357,200円	357,200円	—	
4年間の長期履修	267,900円	267,900円	267,900円	267,900円	

平日夜間、土曜開講

授業は平日の夜間（17:55～21:00）と、土曜日の昼間（9:00～17:50）を中心に開講。夏季休業期間を活用した集中講義も実施しており、働きながら学びたい方にも配慮したカリキュラムとなっています。また、授業は、遠隔地からでも双方向で受講できるオンライン授業を中心に、横須賀キャンパスでの対面授業を組み合わせた、ハイブリッド型およびハイフレックス型として実施しています。

教育訓練給付制度

博士前期課程のすべての領域は、専門実践教育訓練講座として指定されています。一定の条件を満たした場合、入学金や授業料等の一部について、教育訓練給付金の支給を受けることが可能です。申請条件や手続きの詳細については、厚生労働省の公式ウェブサイトをご確認ください。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/jinzaikaihatsu/kyouiku.html



厚生労働省HP

学習環境

大学院生は、院生研究室に設けられた個人ブースにてパソコンを使用することができ、静かで集中した自学自習環境が整っています。附属図書館には、看護学、栄養学、社会福祉学、リハビリテーション学を中心とした専門図書や学術雑誌をはじめ、関連分野の資料を幅広く所蔵しています。図書・雑誌の閲覧に加え、視聴覚資料の利用や各種データベースの活用も可能で、研究活動を多面的に支援します。

また、大学院事務室は平日20時まで開室しており、証明書等の発行や各種申請の受付など、大学院生の円滑な学生生活をサポートしています。

※2026年4月現在



図書館



大学院事務室



博士前期研究室



博士後期研究室

社会福祉領域対談

学生×教員対談企画

Q.大学院に進学したきっかけは？

小幡:私は自治体の社会福祉職として採用され、様々な分野で市民の支援に従事してきました。社会福祉職の人材育成部署に在籍していた時、職員が複雑・多様化する市民の保健福祉ニーズに真摯に向き合う一方、困難を抱えている様子を目の当たりにし、対人援助する職員の支援に取り組む必要性を実感しました。まだ先行研究が少ない自治体職員のソーシャルワーク実践を可視化することで、人材育成や支援者支援に繋がるのではないかと考えたことが大学院入学のきっかけです。

行實:実践で活躍されている中での疑問や課題をどのようにすればよいかということの研究テーマとして取り組まれていましたね。

Q.学生生活について教えてください。

小幡:福祉職場は緊急対応も多く、3年の長期履修制度を選択しました。在学中、児童虐待の部署への異動により業務繁忙となり、研究との両立が2年では難しかったと振り返っています。1年次は職場の協力でフレックス制度を活用し、早めに仕事を終えて、土曜日も含め週3回、履修を目標にしました。2年次は研究計画の作成、倫理審査の提出、研究調査の開始、3年次で修士論文を作成というのが私の3年間のスケジュールでした。

行實:授業は基本的に少人数で行うので、それぞれの教員は両立が叶うように授業日時の設定や方法など工夫しています。1年次に集中して必要単位を取得できるなど、カリキュラム体系自体も仕事と両立できるようになっているので、それをうまく活用していましたね。それに小幡さんは、長期履修学生制度をうまく利用して、計画的に研究をすすめていたと思います。

小幡:研究法や社会福祉調査研究方法論等の授業で、研究方法を習得することができました。定期的開催される学科内研究会等によって発表の機会があり、先生方や院生同士による意見交換等により様々な視点を学ぶ機会がありました。指導教員の行實先生とのゼミや個別指導により、研究課題を徐々に明確化することができ、先生には心から感謝しています。

行實:小幡さんと同じように本学では、保健・医療・福祉の現場で働



行實先生

小幡さん

く中で生まれた問題意識をもって大学院にいらっしゃる方が多いと思います。また、教員も様々な現場経験をもちながら研究を行っているので、意見交換しながら一緒に学びを深めています。私も小幡さんと一緒に地域課題の可視化しながら課題を明らかにしていく研究はとても楽しませていただきました。

Q.今後について教えてください。

小幡:大学院での研究を通じて、実践知を形式知にするためには科学的根拠を持って、社会における課題を把握、分析することの必要性を学びました。研究の成果を学会等での報告により社会に還元することで、より一層、社会福祉に携わる支援者の人材育成につなげていきたいと考えています。また、一人ひとりの市民に支援が行き届くくみを構築し、社会的包摂の実現に寄与できる人材を輩出するために、研究に取り組む大切さを後輩に伝え、自己研鑽の風土を職場において醸成していきたいと考えます。

行實:日々の生活や職場の中で感じた問題点に疑問をもつことから研究は始まります。しかし、それらを整理し言語化するだけでは、研究とは呼べません。研究のルールに則り、これまでの過程や背景を理解した上で、新たな知識を積み重ね、その結果を社会に繋げていくことが研究だと私は思います。小幡さんは、そのあたりは早くから理解し、先行研究などの調査を丁寧に進め、この研究結果を社会（職場）へどのように繋げていくかという意識を常にもっていました。小幡さんの研究テーマである行政の福祉専門職に関する先行研究が少ないので、ぜひ今後も研究を続けて発展させていってください。

大学院の特色について



保健福祉学研究科 副研究科長

水戸 優子

対面とオンラインのハイブリッド型授業

本学大学院は、より高度な対人サービス・ケアの知識・技術・態度の育成のために、教員と学生、学生と学生が直接会って対面で学ぶ授業を大切にしております。一方で、働きながら学ぶ学生や遠方から通う学生が授業に参加しやすいように、オンライン授業が可能な通信環境・設備を整備しております。この両方の授業のよいところを活かすために、横須賀キャンパスの教室とオンライン授業を組み合わせたハイブリッド型授業やハイフレックス型授業を導入しています。

博士前期課程

看護領域／栄養領域／社会福祉領域／リハビリテーション領域

取得できる
学位

修士 (看護学)	Master of Nursing Science	修士 (栄養学)	Master of Nutrition & Dietetics
修士 (社会福祉学)	Master of Social Work	修士 (リハビリテーション学)	Master of Rehabilitation Science



教育理念

少子高齢社会の進展に伴い、療養・介護期間の長期化への対応や在宅ケアの拡充と質の向上、利用者本位のサービス提供の基盤づくりなどの課題が増大しており、高齢期においても住み慣れた地域で質の高い生活を送れるような保健・医療・福祉の連携した取組みが求められています。

このようなニーズに応えるため、本学大学院博士前期課程では「保健・医療・福祉の連携と総合化を念頭に置きつつ、これらを体系的に理解するとともに、各学問領域の専門性を深める教育・研究の推進」を目的として、保健・医療・福祉にかかわる広い理解をもってそれぞれの分野と連携・協力をめざすことのできる高度専門職業人を育成することを目標にしています。

教育目標

- 保健・医療・福祉の諸問題について、現場で実践した内容を体系的に整理し、社会へ発信できる能力を持つ人材の育成
- 行政・施設・地域などの現場において、リーダーまたは管理者として活躍できる人材の育成
- 現場で働く社会人を受け入れ、実社会で身につけた実践的な知識・経験を学問的に検証しつつ、さらにこれを高めていく人材の育成

アドミッション・ポリシー

- 人や人を取り巻く社会に関する深い理解を求め、保健福祉学の探求に自ら取り組む意欲のある人
- 専門職や当事者と協働し、各種システムと連携して、課題を解決し、評価する能力を高めたい人
- 保健・医療・福祉の課題を、科学的・論理的に研究するための基礎的な能力を備えている人
- 地域社会の保健・医療・福祉分野のリーダー、管理者または教育者として貢献する意欲のある人

※さらに領域毎に具体的なアドミッション・ポリシーを定めています。

入学選抜試験では、以上の観点に立って、筆記試験においては専門知識などを、面接選考においては課題解決へ向けて意欲的に研究に取り組もうとする力を、総合的に評価します。

修士論文・学位取得までの流れ(例示) (CNS・助産実践コースを除く)

	時期	修士論文
1 年次	4月	●入学 ●指導教員の希望を提出
	5月	●指導教員・指導補助教員の決定
	6月	●研究課題決定
修 了 年 次	7月～	●研究計画立案・遂行(修士論文) ●研究計画発表会の開催(領域ごと) ●研究倫理審査(必要に応じて)
	4月	●研究計画報告書提出
	10月～11月	●修士論文中間報告会の開催(領域ごと)
	11月	●修士論文審査の申請
	1月	●修士論文提出 ●修士論文最終試験
3月	●公開論文発表会での発表 ●修了式	

取得できる
資格・免許

看護領域 (助産実践コースのみ)	助産師国家試験受験資格	栄養領域 (選択希望者のみ)	栄養教諭専修免許状
看護領域 (選択希望者のみ)	養護教諭専修免許状	栄養領域 (選択希望者のみ)	栄養教諭専修免許状

教育カリキュラム

保健・医療・福祉の現場で得た知識・経験を学問的に検証するとともに、理論化していく力を身につけることができるカリキュラムとなっています。また、実践の場において、リーダーや管理者として活躍できるような学びを得られる科目を設定しています。

博士前期課程では、全ての領域が文部科学大臣認定「職業実践力育成プログラム(BP)」を取得しています。



共通科目

基幹科目

全員必修となっており、保健・医療・福祉の実践・研究を進めるにあたり、ヒューマンサービスというより広い視点からそれぞれの専門性を見つめ直します。(ヒューマンサービステ論・演習)

基礎科目

研究課題を探索し、修了後も研究的な視点で課題解決に取り組んでいくことのできる基礎的な能力を培うことを目的とした科目です。(研究法Ⅰ、Ⅱ)

連携科目

保健・医療・福祉の各分野の枠にとらわれない幅広い知識を習得し、他分野との連携・協働を図ることのできる能力を育成するための科目を設けています。

- 政策・行政(保健福祉行政特論)……………自治体などの行政機関で保健・医療・福祉に関連する政策立案などを担当する人材を想定した科目
- 管理(人事管理・育成論)……………保健・医療・福祉に関連する施設などの管理・運営を担当する人材を想定した科目
- 地域(ケアマネジメント・地域ケア特論)…地域に根差し、在宅介護等の保健・医療・福祉サービスの提供を行う人材を想定した科目
- 教育(教育方法論概説)……………養護教諭・栄養教諭に加え、保健・医療・福祉分野で教育的立場を担う人材を想定した科目
- 専門連携(コンサルテーション論)……………専門職間の理解と連携を学ぶことを狙いとした科目

+

専門科目

看護領域の専門科目

科目例 看護管理学・政策特論、ウィメンズヘルスクア特論、慢性看護学特論、地域看護学特論、精神保健看護学特講 など

看護CNSコースの専門科目

日本看護学会協賛において高度実践看護師教育課程の承認を受けて、がん看護と小児看護のCNSコースを設置しています。また、2026年4月に、慢性看護のCNSコースが新たに開設されました。

科目例 がん看護学特論Ⅰ～Ⅳ、小児看護学特論Ⅰ～Ⅴ、慢性看護特論Ⅰ～Ⅴ など

助産実践コースの専門科目

助産師国家試験受験資格を取得するコースを設置しています。

科目例 助産学概論、助産基礎特論Ⅰ・Ⅱ、助産診断技術特論Ⅰ～Ⅲ、助産実践演習Ⅰ・Ⅱ、助産学実践実習 など

養護教諭専修免許状取得のための専門科目(養護教諭一種免許状を有する者に限る)

必要な科目を履修することにより、養護教諭専修免許状を取得することが可能です。

科目例 学校保健学特論、養護・栄養教諭連携論 など

栄養領域の専門科目

科目例 人間栄養学、栄養ケア・マネジメント特論、臨床栄養学特論 など

栄養教諭専修免許状取得のための専門科目(栄養教諭一種免許状を有する者に限る)

必要な科目を履修することにより、栄養教諭専修免許状を取得することが可能です。

科目例 学校栄養教育特論、栄養実践活動調査研究特論、養護・栄養教諭連携論 など

社会福祉領域の専門科目

科目例 社会福祉原論、児童福祉特論、障害者福祉特論、ソーシャルワーク特論Ⅰ～Ⅳなど
○「認定社会福祉士」研修受講について 社会福祉領域では、「認定社会福祉士」研修認証科目の一部を受講することが可能です。

リハビリテーション領域の専門科目

科目例 ○理学療法学 運動機能制御学特論、臨床理学療法学特論 など
○作業療法学 生活障害作業療法学演習、機能障害作業療法学特論 など

専門科目(共通)

修士論文を作成します。研究指導は指導教員1名と指導補助教員1名の計2名があたります。

学生からのメッセージ



理想とする栄養管理を 研究活動によって解き明かす

私は学部卒業後から現在まで病院で管理栄養士として働いています。学部時代は、研究室での活動や臨地実習などを通して臨床やスポーツ現場などにおける栄養管理の重要性と管理栄養士に期待される役割の大きさを実感しました。自分も栄養の力をもって人々の健康を支えられるよう日々の臨床業務に尽力しています。来院される患者様の多くは様々な健康・栄養に関する課題を抱えており、実施した栄養管理が適切であったか、より良いケアがあったのではないかと悩むことが多くなりました。そのたび、現在の知識や能力では未熟であり理想とする栄養管理を行うためには学びをさらに深めていかなければならないと感じています。そこで、より高度な栄養管理能力、多職種の役割を理解し協働する力、日々疑問に感じることを研究活動によって解き明かす力を身につけることを目標として、大学院への進学を決意しました。

本学のカリキュラムは働きながら学ぶことができるよう配慮されているため、現在も管理栄養士として臨床業務を行いながら大学院へ通っています。そのため本学での学習は実践の場へと還元し、試行錯誤しながらよりよい栄養ケアにつなげられるよう取り組んでいます。

栄養領域 濱田 健太郎さん

ソーシャルワーカーとしての ステップアップのために

私は本学を卒業し、大学病院でソーシャルワーカーとして勤務しています。一念発起して大学院へ入学し、今まさに「研究すること」について学んでいる途中です。まだ道半ばではありますが、私はソーシャルワーカーが「研究すること」は、自身の実践が「本当に最善と言えるのか」を、先輩が積み重ねてきた学問の文脈に置き、吟味し、そこに新たな“何か”を積み上げる過程なのだ学びました。この過程を学ぶことは、現場で理論に基づいた実践を行うことや、実践課題を正確に捉え、より良い解決に導くことにもつながってきているように感じています。また入学後は同じ領域だけでなく他領域でも勤勉で熱意のある素晴らしい仲間達と出会い、共に学ぶことができています。大学院での学びは必ずソーシャルワーカーとしてのステップアップに繋がると、本当にチャレンジして良かったと思っています。

私はプライベートでは2児の父親です。家族には感謝しきれませんが、本学には働きながら学ぶことができる仕組みがあること、何より先生方のご配慮によりなんとか両立することができています。

社会福祉領域 市川 賀一さん



修了生からのメッセージ

学びと実践をつなぐ 看護教育への挑戦

看護部で教育担当という役割をいただき、教育に関する知識を深めたいと思い大学院への進学を決めました。長期履修制度を利用し働きながらの学生生活でしたが、院内教育プログラムの立案など、大学での学びと病院での実践がタイムリーにつながり、とても有意義な3年間となりました。

また、急性期病院で働く中で、看護師が「共に育つ」ことができる職場づくりが重要であると考え、その基盤となる心理的安全性をテーマとした研究を行いました。研究を通し、職場風土づくりや看護師教育の課題について深く考える機会となり、今後の教育実践に向け大きな学びを得ることができました。臨床での経験を大切にしながら、看護師の学びや成長を支えるための研究を続けていきたいと考えています。

看護領域 鈴木 菜穂さん

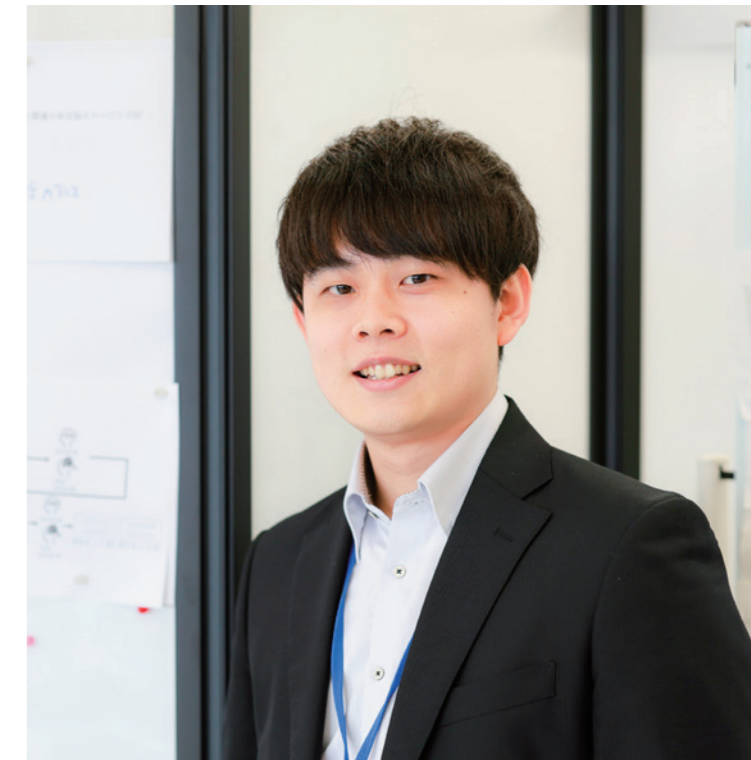


リハビリテーションのエビデンス構築を目指す 国際的に活躍する研究者を目指して

私は大学3年次から研究の魅力に惹かれ、大学院に進学したいと考えていました。4年次に行った卒業研究では、仲間と協力しながら積極的に研究活動に取り組み、在学中に学会発表を経験することが出来ました。卒業後には高度急性期病院に就職しましたが、経験則に基づいたリハビリテーション手法が多く行われている現状を目の当たりにし、エビデンスの構築が急務であると感じたことから、勤務開始2年目で大学院進学を決めました。2年間の学生生活では、勤務以外の時間を研究に注ぎ、国際学会での発表や、国際誌への論文投稿も行うことが出来ました。

本学大学院の特徴は、多様な分野の先生方、大学院生と交流を持つことが出来ることです。特に教員との距離が近く、勤務をしながらでも研究活動に没頭できる環境が整っている点は、非常に魅力的であると思います。今後は博士後期課程へ進学し、研究成果を確実に臨床現場へ届けつつ、国際的に活躍する研究者になることを目指して、研究活動に取り組んでいきたいと思っています。

リハビリテーション領域 小久江 智耶さん





教育理念

急激に進行する少子高齢社会等の到来を見据え、「保健・医療・福祉にかかわるヒューマンサービスの今日の実践・明日の実践・未来の実践を牽引し、先導することに資する教育・研究の推進」を教育理念として掲げています。

この教育理念に基づき、本教育課程においてヒューマンサービスの実践を「看護学」「栄養学」「社会福祉学」「リハビリテーション学」の観点から学際的に探究する対人援助の学問に取り組み、ヘルスケアとソーシャルケアの有機的連携を基盤とした科学研究成果を産出することを目指します。

教育目標

- 01 保健福祉分野に関わる深い見識を備え、ヒューマンサービスの実践に対する倫理観と使命感をもって、サービスやケアの開発とその効果検証、保健福祉人材の育成や政策提言、健康寿命の延伸等に寄与する研究に取り組む研究者を育成する
- 02 保健福祉分野の諸問題について学際的かつ国際的な視点で現象を整理し、研究成果を活用できるとともに、ヒューマンサービスの実践を先導できる教育者を育成する
- 03 保健福祉分野の専門的知識や科学的根拠をもって多職種間のマネジメントや連携と総合化を牽引するとともに、研究能力を発揮して実践現場に変革を起こすことができる実践者を育成する

アドミッション・ポリシー

- 01 人や人を取り巻く社会に関する深い理解を求め、保健福祉学の発展に貢献する意欲のある人
- 02 保健・医療・福祉の課題を、科学的・論理的にかつ多角的に研究するための基礎的な能力を備えている人
- 03 専門職や当事者と協働し、各種システムと連携して、課題を解決する素養を備えている人
- 04 地域社会の保健・医療・福祉分野のリーダーまたは管理者、教育・研究者、政策立案者として貢献する意志のある人またはそのようなキャリアパスを期待されている人

入学者選抜試験では、以上の観点に立って、主要論文及び今後の研究計画についてのプレゼンテーションにより専門知識などを、面接選考においては課題解決へ向けて意欲的に研究に取り組もうとする力を、総合的に評価します。

3月修了者の学位取得までの流れ(例示) (休学等なしの場合)

	時期	博士論文
1 年次	4月	●入学 ●指導教員・指導補助教員の希望を提出
	5月	●指導教員・指導補助教員・研究課題の決定
	6月～	●研究計画立案 ●遂行 ●研究倫理審査(必要に応じて)
	10月	●博士論文中間報告会での発表
	1月～	●研究計画発表会での発表
2 年次	5月	●研究計画審査の申請(最終締切)
	10月	●博士論文中間報告会での発表
	11月	
修了 年次	12月～3月	
	10月	●博士論文予備審査の申請(最終締切) ●博士論文予備審査公開発表会での発表
	11月	●博士論文予備審査会の実施
	12月	
	1月	●博士論文審査の申請(最終締切) ●博士論文審査会(最終試験)の実施
	2月	
	3月	●公開論文発表会での発表 ●修了式

教育カリキュラム

保健・医療・福祉分野において、新たなサービスやケアの開発、保健人材の育成や政策提言など、この分野の発展に寄与し、実践現場に変革をもたらす研究成果を産出する力を身につけることを目的としたカリキュラムを設定しています。

保健福祉共通科目

保健・医療・福祉の全体的な理解と総合連携の基盤になる理論・考え方、システムについて学びます。

科目例 保健福祉学・ヒューマンサービス特論(必修)、サービス評価研究特論、多職種連携システム開発特論など

保健福祉専門科目・保健福祉演習科目

保健福祉専門科目では、専門領域を科学的にとらえ、研究を推進するための知識や能力を獲得します。また、演習科目では、専門科目の学びを自らの専門性や研究テーマに関連づけ、より実践的に研究能力を高める内容を演習スタイルで学修します。

科目例 ○看護系 成長発達期健康看護特論、療養期健康看護演習 など
○栄養系 食品健康科学特論、保健福祉栄養評価演習 など
○社会福祉系 児童福祉学特論、地域共生実践・政策演習 など
○リハビリテーション系 リハビリテーション病態解析学特論、リハビリテーション認知学習行為学演習 など

保健福祉研究科目

博士論文を作成します。研究指導は、指導教員1名と指導補助教員の2名により行い、指導補助教員のうち1名は、指導教員と異なる専門系で、博士論文の指導を担当できる教員があたります。

9月修了・単位取得後退学

9月修了制度は、博士後期課程に3年以上在学し、所定の単位を修得するとともに、必要な研究指導を受け、博士論文審査に合格した場合に、従来の3月修了に加えて、9月に修了することを可能とする制度です。

また、**単位取得後退学制度**は、3年以上在学し、所定の単位を修得し、必要な研究指導を受けたものの、在学中に博士論文審査に合格せず退学した場合に適用されます。退学後1年以内に博士論文審査に合格することで、博士後期課程の修了が認められ、博士の学位が授与される制度です。



授業風景



研究発表会

修了生からのメッセージ

研究生活について

私は、出産を取り巻く環境の大きな変化を踏まえた助産学実習の在り方について研究しました。少子化の進行や高年初産婦の増加などを背景に、助産師教育ではハイリスクな状況にも対応できる助産師の養成が意識されています。しかし、資格を有しておらず、経験が浅い助産学生にとって、ハイリスクな状況下に置かれる母子への対応は容易ではありません。そのため、私は、助産学実習の在り方を研究しようと考えました。

昼は教員として看護師・助産師基礎教育に携わり、主に夜間や休日を研究活動に当てました。特に昼夜休日問わず、学生対応にあたる必要がある助産学実習期間は、頭を切り替えることが難しく感じた時もありましたが、職場の上司や同僚に支えられただけでなく、研究中にも可能なりフレッシュ方法を編み出したことで、この生活をなんとか乗り越えられました。

神奈川県立保健福祉大学に

入学を決めた理由は？

研究者として尊敬でき、指導を仰ぎたいと思える存在がいたことが1番の決め手でした。研究の質を高めるには、研究内容についての意見交換が大切だと考えています。この大学には、積極的に考えや思いを伝えることができる環境がありました。そして、私の話に耳を傾け、率直な意見をくださる教員が多くいてくださるおかげで、研究活動を進めることが出来たと感謝しています。



看護系修了 瀬谷 絵莉佳さん

研究科の仲間について

看護系である私の同期には、栄養・社会福祉・リハビリテーション系と全領域の専門職が揃っていました。政策を考える課題に取り組んだ時には、全員で夜中まで奮闘したこともありました。直接会う機会は限られていましたが、院生同士の絆を実感していました。研究への意見交換だけでなく、様々な締め切りを確認し合うなど、一緒に修了することを目標に支え合いました。何時間でも語り合える個性豊かな同期に出会い、かけがえのない経験ができました。

学習環境について

修了に必要な単位取得に関わる科目の授業は、基本的に平日の夜間と土曜日に開講されます。ただ、時には平日の日中にも開講されるので、社会人である私たちにとって、オンラインでの授業や研究発表会が導入されていたことは、とても救いでした。また、事務手続きや研究発表会の運営など、大学院事務の方々がかめ細やかに対応してくださりました。指導教員以外の教職員の方々も、学内でお会いすると、声をかけ、研究の進捗状況を気にかけてくださりました。とても温かい研究環境に恵まれました。

博士後期課程修了までの3年間の各年次で取り組んだことと、アドバイス

1年目

取り組んだこと	5月頃	指導教員と研究計画の再検討
	11月頃	3年間の研究スケジュールの明示
	1月頃	研究計画審査受審/研究①(文献レビュー・副論文)執筆開始

2年目

4月頃	研究①学術誌投稿/研究②倫理審査受審
11月頃	研究②専門家からの解析指導・学術集会発表/研究③倫理審査受審
3月頃	研究の進捗確認とスケジュール調整

3年目

7月頃	研究③データ収集終了
9月頃	予備審査用博士論文提出締め切り
1月頃	最終審査用博士論文提出締め切り



研究参加者のリクルートに苦戦し、データ収集に時間を要しました。9月には完成版に近い博士論文を執筆し、予備審査を受審しなければいけません。限られた時間の中で、新規性のある研究成果を出し、論文として形にするのはとても大変な作業です。指導教員と密にコンタクトを取り、定期的に進捗を報告し、指導いただきながら進めることがとても重要です。

※掲載されているスケジュールは取材時点のものです。

教員紹介

※氏名の下は、博士前期課程の研究指導に関わる教員の研究テーマです。博士後期課程では指導できる内容が異なる場合があります。どちらの課程も出願前相談の際に必ず募集要項を確認してください。
※担当教員及び研究テーマは変更になることがあります。

看護領域 (看護教育学)

博士前期・後期課程担当 教授
宮芝 智子
博士前期・後期課程担当 准教授
加藤木 真史
博士前期課程担当 准教授
渡邊 恵

- 看護基礎教育に関する研究
- 看護継続教育に関する研究
- 看護学生および看護職者の発達への支援に関する研究

看護領域 (基礎看護学)

博士前期・後期課程担当 副研究科長・教授
水戸 優子
博士前期・後期課程担当 准教授
加藤木 真史
博士前期課程担当 准教授
渡邊 恵
博士前期課程担当 講師
長島 俊輔

- 看護技術、技能の実証に関する研究
- ヘルスアセスメント・フィジカルアセスメントに関する研究
- 基礎看護学に関する研究
- 看護基礎教育における教授学習方法に関する研究
- 看護実践能力の向上に関する研究

看護領域 (ウィメンズヘルスケア)

博士前期・後期課程担当 教授
谷口 千絵
博士前期・後期課程担当 准教授
吉田 安子
博士前期課程担当 准教授
田辺 けい子 山田 加奈子

- 妊娠・分娩・産褥・新生児の看護に関する研究
- 女性の健康と看護に関する研究
- セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツと看護に関する研究
- 助産師の基礎教育および継続教育に関する研究

看護領域 (小児看護学)

博士前期・後期課程担当 教授
川名 るり
博士前期・後期課程担当 准教授
西名 諒平

- 健康問題を抱えた子どもと家族の体験と看護に関する研究
- 地域で生活する子どもと家族への支援に関する研究
- 小児看護の基礎教育および継続教育に関する研究
- 卓越した小児看護実践の言語化

看護領域 (慢性看護学)

博士前期・後期課程担当 教授
高橋 奈津子
博士前期課程担当 講師
安藤 里恵

- 慢性疾患とともに生活する人・家族の体験と看護に関する研究
- 慢性看護に関する意思決定支援、セルフマネジメント支援、ベスト・サポート・ケア、緩和ケアに関する研究
- 慢性看護に関するチーム医療と継続教育に関する研究

看護領域 (療養生活支援看護学)

博士前期・後期課程担当 教授
間瀬 由記
博士前期・後期課程担当 准教授
黒河内 仙奈

- 健康寿命の延伸に関する研究
- 生活・療養・退院支援、地域包括ケア、QOLに関する研究
- エンドオブライフケアに関する研究
- 多職種連携、チームビルディングに関する研究

看護領域 (先端長寿緩和ケア)

博士前期・後期課程担当 教授
野村 美香
博士前期課程担当 准教授
大場 美穂 土井 英子

- 先端治療・侵襲性の高い治療を受ける患者・家族のケアに関する研究
- 周手術期・救急看護・クリティカルケアに関する研究
- がんの診断・治療から終末期に至る療養過程の緩和ケアに関する研究
- がん看護、急性期看護に関するチーム医療と継続教育に関する研究

看護領域 (地域看護学・養護教諭専修コース)

博士前期・後期課程担当 教授
臺 有桂
博士前期課程担当 准教授
高橋 佐和子 高橋 秀治 中山 直子

- 公衆衛生看護活動におけるデータ分析とその活用に関する研究
- 地域や在宅(の生活の場)におけるケアと多職種連携に関する研究
- 学校保健及び養護教諭の活動に関する研究(コース選択者は、養護教諭専修免許取得可)
- 公衆衛生看護および在宅ケア人材育成に関する研究

看護領域 (精神看護学)

博士前期・後期課程担当 教授
嵐 弘美

- メンタルヘルス上のニーズを有する患者・家族への看護に関する研究
- 看護実践における困難および看護職のメンタルヘルス支援に関する研究
- 精神看護における倫理に関する研究
- 精神看護の実践知に関する研究

看護領域 (看護開発学)

博士前期・後期課程担当 教授
石原 美和
博士前期課程担当 准教授
松永 早苗

- 健康・看護政策とその評価に関する研究
- 看護に関する先駆的事例を政策提言へ発展させる研究
- 感染症・健康危機管理システムに関する研究

看護領域 (CNSコースがん看護)

博士前期・後期課程担当 教授
野村 美香
博士前期課程担当 准教授
小林 珠実 土井 英子

- 診断から終末期に至る療養過程における緩和ケアに関する研究
- チーム医療・療養の場の移行における連携・調整に関する研究
- 患者・家族・医療者のストレス対処に関する研究
- 治療や療養の場の移行期にある患者・家族の意思決定に関する研究

看護領域 (CNSコース小児看護)

博士前期・後期課程担当 教授
川名 るり
博士前期・後期課程担当 准教授
西名 諒平

- 卓越した小児看護実践の言語化
- 子どもと家族の権利擁護、倫理的課題の解決に向けた研究
- 子どもと家族の看護に携わる看護職の質向上に関する研究
- 子ども・家族・医療機関・学校間などの連携・調整に関する研究

看護領域 (CNSコース慢性看護)

博士前期・後期課程担当 教授
高橋 奈津子 間瀬 由記
博士前期・後期課程担当 准教授
黒河内 仙奈
博士前期課程担当 講師
安藤 里恵

- 卓越した慢性看護実践に関する研究
- 当事者の体験・語りに関する研究
- セルフケア支援、緩和ケアに関する研究
- 慢性看護に関する意思決定支援に関する研究

看護領域 (助産実践コース)

博士前期・後期課程担当 教授
谷口 千絵
博士前期・後期課程担当 准教授
吉田 安子

- 助産実践の課題解決に向けた研究
- 性と生殖に関する健康と権利に関連する当事者の支援に関する研究
- 助産実践における医療・福祉の連携・協働に関する研究
- エビデンスのある助産実践を創出するための基礎的研究

栄養領域

博士前期・後期課程担当 研究科長・教授
鈴木 志保子

- 競技選手への競技力向上のための栄養サポートに関する研究
- 子どもの発育・発達に関する研究
- 生活習慣病の予防に関する研究

教員紹介

※氏名の下は、博士前期課程の研究指導に関わる教員の研究テーマです。博士後期課程では指導できる内容が異なる場合があります。どちらの課程も出願前相談の際に必ず募集要項を確認してください。

※担当教員及び研究テーマは変更になることがあります。

学生募集要項は
大学Webサイトを
ご覧ください。



栄養領域

博士前期・後期課程担当 教授
田中 和美

- ・保健指導及び重症化予防の栄養改善に関する研究
- ・介護予防のための栄養改善に関する研究
- ・認知症と栄養ケアに関する研究

栄養領域

博士前期・後期課程担当 教授
倉貫 早智

- ・個別化栄養と終末糖化産物(AGE)評価基盤の構築
- ・若年女性のやせ・睡眠・PMSと終末糖化産物(AGE)
- ・健診データ等を用いた腎機能低下要因の解析

栄養領域

博士前期・後期課程担当 教授
五味 郁子

- ・入院患者・在宅療養者の栄養管理に関する研究
- ・高齢者の栄養管理に関する研究
- ・栄養ケアの倫理に関する研究

栄養領域

博士前期・後期課程担当 教授
向井 友花

- ・疾病の予防・改善に役立つ食品や食品成分の探索およびその分子機構に関する研究
- ・母親の食が子の健康に及ぼす影響の分子機構に関する研究
- ・食品衛生管理(調理施設における微生物制御)に関する研究

栄養領域

博士前期・後期課程担当 教授
村越 智

- ・栄養投与ルートが免疫に与える影響に関する研究
- ・高度外科的侵襲時においても生体防御能を維持できる栄養投与方法に関する研究
- ・アミノ酸関連物質を用いた侵襲時の生体防御能改善に関する研究

栄養領域

博士前期・後期課程担当 教授
山西 倫太郎

- ・ビタミンA(レチノール)による細胞抗酸化誘導について解析する
- ・免疫機能に対するレチノールの影響について解析する

栄養領域

博士前期課程担当 准教授
飯田 綾香

- ・栄養教諭による学校における食育の推進と個別的な相談指導に関する研究
- ・慢性肝疾患の栄養療法に関する基礎的研究

栄養領域

博士前期・後期課程担当 准教授
駿藤 晶子

- ・AI(人工知能)を用いた食事調査法に関する研究
- ・大量調理による栄養素の調理損失に関する研究

栄養領域

博士前期・後期課程担当 准教授
遠又 靖丈

- ・ヘルスサービスの事業評価(効果評価など)に関する疫学的研究
- ・老化(生活機能低下、認知症など)における栄養学的な予防因子に関する疫学的研究
- ・食事パターンに関する疫学的研究

栄養領域

博士前期課程担当 准教授
樋口 良子

- ・嚥下調整食の調理法に関する研究
- ・地域における防災・災害時食支援に関する研究

栄養領域

博士前期課程担当 講師
片岡 沙織

- ・女性アスリートに対する栄養サポートに関する研究
- ・パラアスリートに対する栄養サポートに関する研究

栄養領域

博士前期課程担当 講師
中西 朋子

- ・子どもの生活習慣(主に睡眠について)に関する研究
- ・健康・生活観と健康に関する研究

社会福祉領域

博士前期・後期課程担当 教授
小林 理

- ・子どもと家庭のソーシャルワークに関する研究
- ・社会的養護に関する実践と制度の関係に関する研究

社会福祉領域

博士前期・後期課程担当 教授
新保 幸男

- ・子ども家庭福祉に関する実践研究・政策研究
- ・社会福祉学理論、ヒューマンサービス理論に関する研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 教授
鈴木 俊文

- ・災害時における福祉支援に関する研究
- ・介護福祉・介護福祉教育に関する研究

社会福祉領域

博士前期・後期課程担当 教授
高橋 恭子

- ・医療福祉、医療ソーシャルワークに関する研究
- ・社会福祉実践の歴史に関する研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 教授
玉川 淳

- ・保健医療福祉の連携に関する研究
- ・保健医療福祉人材の確保に関する研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 教授
松江 暁子

- ・公的扶助における能力活用のあり方に関する研究
- ・失業・貧困問題と社会保障制度に関する研究
- ・韓国における福祉制度・政策に関する研究

社会福祉領域

博士前期・後期課程担当 教授
中村 美安子

- ・地域生活継続支援と環境整備に関する研究
- ・住民福祉活動及び活動拠点に関する研究

社会福祉領域

博士前期・後期課程担当 教授
行實 志都子

- ・ピアサポートに関する研究
- ・ソーシャルワーカーのためのキャリアラダーに関する研究
- ・精神障害者の就労支援に関する研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 准教授
在原 理恵

- ・障害者の地域居住における当事者の自律性と社会関係に関する研究
- ・地域居住サービスを行う法人・事業所のアドミニストレーションに関する研究

社会福祉領域

博士前期・後期課程担当 准教授
大島 憲子

- ・在宅医療・介護連携及び家族支援に関する研究
- ・認知症施策と認知症ケアの質の向上に関する実践研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 准教授
岸川 学

- ・自閉スペクトラム症児・者とその家族への地域社会を基盤とした生活支援に関する研究
- ・コミュニティ・ソーシャルワークに関する研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 准教授
松江 暁子

- ・呼吸理学療法の作用機序に関する研究
- ・高齢者の身体活動量に関する研究
- ・理学療法士を目指す学生の職業適性に関する研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 准教授
吉中 季子

- ・女性と子どもの貧困に関する研究
- ・困窮者支援に関する研究
- ・社会保障制度と貧困に関する研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 講師
種田 綾乃

- ・障害者当事者活動・ピアサポート活動に関する研究
- ・地域精神保健医療福祉に関する調査研究・実践研究

社会福祉領域

博士前期課程担当 講師
福馬 健一

- ・養護老人ホームに関する実践及び制度に関する研究
- ・高齢者福祉、特に養老施設に係る歴史研究

リハビリテーション領域 (理学療法学)

博士前期・後期課程担当
学部長・教授
菅原 憲一

- ・運動制御機構に関する脳波・筋電図の研究
- ・運動学習に関する電気生理学的研究
- ・各種動作および動作障害に関わる脳波・筋電図学的研究

リハビリテーション領域 (理学療法学)

博士前期課程担当 教授
仙波 浩幸

- ・精神障害者における身体的リハビリテーションに関する研究
- ・精神障害者における理学療法評価に関する研究
- ・身体活動が精神障害者の精神機能へ及ぼす影響に関する研究

リハビリテーション領域 (理学療法学)

博士前期課程担当 准教授
内田 賢一

- ・呼吸理学療法の作用機序に関する研究
- ・高齢者の身体活動量に関する研究
- ・理学療法士を目指す学生の職業適性に関する研究

リハビリテーション領域 (理学療法学)

博士前期課程担当 准教授
島津 尚子

- ・片麻痺者のバランス・歩行に関する研究
- ・切断者のリハビリテーションに関する研究

リハビリテーション領域 (理学療法学)

博士前期・後期課程担当 准教授
鈴木 智高

- ・二重課題法による歩行中の注意需要評価に関する研究
- ・動作における運動制御や姿勢制御に関する研究
- ・適応的歩行能力の向上を目的とした障害物跨ぎやターン制御に関する研究

リハビリテーション領域 (理学療法学)

博士前期・後期課程担当 准教授
平瀬 達哉

- ・高齢者の健康寿命の延伸に寄与するリハビリテーション戦略の確立に向けた研究
- ・生活期リハビリテーションの効果検証に関する研究

リハビリテーション領域 (理学療法学)

博士前期課程担当 准教授
藤田 峰子

- ・臨床における物理療法機器の安全管理に関する研究
- ・骨盤底筋に関する研究
- ・尿失禁に対する電気刺激療法の有効性に関する研究

リハビリテーション領域 (作業療法学)

博士前期・後期課程担当 教授
笹田 哲

- ・小児領域の作業療法に関する研究
- ・対象者の役割やQOLに関する研究
- ・人間作業モデルの評価、介入に関する研究

リハビリテーション領域 (作業療法学)

博士前期・後期課程担当 教授
白濱 勲二

- ・脳損傷者・高齢者における運動・認知機能に関する研究
- ・上肢機能障害に関する研究
- ・リハビリテーションの効果に関する研究

リハビリテーション領域 (作業療法学)

博士前期・後期課程担当 教授
奥原 孝幸

- ・精神障害領域における作業療法に関する研究
- ・精神障害者のリハビリテーションに関する研究
- ・認知行動療法を用いた臨床実践的研究

リハビリテーション領域 (作業療法学)

博士前期・後期課程担当 教授
長山 洋史

- ・作業療法の効果と費用効果に関する研究
- ・レセプトデータ、カルテデータなどの臨床データ分析

リハビリテーション領域 (作業療法学)

博士前期・後期課程担当 准教授
渡邊 愛記

- ・身体障害領域における作業療法の効果に関する研究
- ・脳血管障害患者の生活動作支援システムの開発および研究
- ・認知症における作業療法の有効性に関する研究

リハビリテーション領域 (作業療法学)

博士前期課程担当 准教授
小河原 格也

- ・フレイル予防に関する研究
- ・高齢期・地域領域の作業療法に関する研究

共通分野

博士前期・後期課程担当 教授
津田 学

- ・栄養ゲノミクスおよび栄養遺伝学を用いた研究
- ・ショウジョウバエの飢餓応答に関する研究
- ・ショウジョウバエを用いた脂質代謝の研究

共通分野

博士前期・後期課程担当 教授
木村 芳滋

- ・線虫を用いた慢性疾患の発生機序に関する研究
- ・線虫を用いたストレス応答に関する研究
- ・線虫を用いた生体分子の局在イメージングに関する研究

共通分野

博士前期・後期課程担当 教授
成 者 鉉

- ・昆虫生体の透明化技術開発
- ・アメリカミズアブの飢餓超耐性の分子機構の研究
- ・ショウジョウバエ一生まるごと記録装置の開発とその応用

共通分野

博士前期・後期課程担当 教授
深沢 和彦

- ・インクルーシブ教育の推進に関する研究
- ・教師の指導行動と児童生徒の適応感に関する研究
- ・学級集団づくり及び教員組織づくりに関する研究

共通分野

博士前期・後期課程担当 准教授
生田 倫子

- ・家族に関する心理学の基礎・実践研究
- ・臨床カウンセリングの基礎・実践研究
- ・組織のコンサルテーションに関する実践研究

共通分野

博士前期・後期課程担当 准教授
城川 美佳

- ・小児の健康リテラシーに関する研究
- ・在日外国人を対象とした感染症に関する情報提供のあり方に関する研究
- ・学校における健康教育に関する研究

共通分野

博士前期・後期課程担当 准教授
志村 華絵

- ・白血病細胞の分化増殖抑制に関する研究
- ・貧血の病態生理に関する研究
- ・高齢者と幼児の世代間交流が両者に及ぼす影響に関する研究

共通分野

博士前期・後期課程担当 准教授
村山 綾子

- ・大脳皮質の発生・発達に関する研究
- ・小型霊長類を用いた統合失調症に関する研究
- ・愛着障害に関する研究
- ・脳腸相関における神経発生および維持に関する研究